



〈翻訳〉エイブラハム・カーン著「スウェット ショップのロマンス」

島津, 厚久

(Citation)

近代, 129:31-53

(Issue Date)

2025-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493637>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493637>



〈翻訳〉エイブラハム・カーン著 「スウェットショップのロマンス」

島 津 厚 久 訳

序 ⁽¹⁾

エイブラハム・カーン (Abraham Cahan, 1860-1951)⁽²⁾ の短編小説「スウェットショップのロマンス」(“A Sweatshop Romance”) は、ロナルド・サンダース (Ronald Sanders) によれば、1898 年にヒュートン・ミフリン社 (Houghton, Mifflin and Company) から『輸入された花婿、その他ニューヨーク・ゲットー短編集』(*The Imported Bridegroom and Other Stories of the New York Ghetto*) が出版されるに際し、既出の短編としてそこに収録される形で多くの読者の目に触れることとなったが、もともとは、1895 年に「スウェットショップにて」(“In the Sweatshop”) という題名で『短編小説』(*Short Stories*) 誌に発表されたものである (Sanders 228, 195)。

作者のカーンは現代ユダヤ系アメリカ文学の祖ともいえる作家であり、その略歴については、つとに、浜野成生氏がその著書『ユダヤ系アメリカ文学の出版』(研究社 1984) において述べているところであるが、本稿では改めて、サンダースの著書『ローワー・イースト・サイドのユダヤ人 — 移民の世代』(*The Lower East Side Jews: An Immigrant Generation*, Dover Publications Inc., 1999) を手引きに自分なりにまとめてみたい (以下、括弧内の数字は同書のものである)。

ローマ軍によって父祖の地パレスチナを追われて以来ディアスポラ (Diaspora)

と呼ばれる離散を余儀なくされたユダヤ人のうち、ヨーロッパへと渡って行った者たちについては、最終的にドイツ系とロシア・東欧系とに大別されることとなった。ドイツ系に関しては、フランス革命後のユダヤ人解放の進展やハスカラ（Haskalah）と呼ばれるユダヤ啓蒙主義運動などにより、周囲との同化や社会的権利の獲得が進んだ。一方ロシアでは、皇帝独裁の下、居住制限、徴税、兵役などでユダヤ人たちは苦しめられ、それ以上に、ポグロム（Pogrom）というユダヤ人虐殺の恐怖に常に曝されていた。

そうした中、カーンはリトアニアで生まれた。そして、1880年、20歳の時に彼は初めて革命運動に出会う。「1880年の夏の初め……私は革命運動の秘密文書に初めてお目にかかった。自分の友人2人がヴィルナの地下サークルに所属していることが分かり、二人が私に社会主義の文書をくれた。私が読んだ初めてのものだった。その後、2人は他のメンバーにも紹介してくれ、私は革命家の一家に入ることを認められた。このことは、私の人生全体に影響を与える変化を私の中に引き起こした」(35)というカーン自身の言をサンダースは引用している。

1881年3月に、ロシア皇帝アレクサンドル2世（Alexander II）が爆弾で暗殺される。彼は農奴解放を行い、ユダヤ人に対しても居住制限の緩和など比較的开明的な政策を行ったのだが、逮捕された犯人グループの中には少なからずユダヤ人がおり、ポグロムが頻発するに至った。また、警察も社会主義勢力の弾圧を図り、教育大学卒業後に白ロシアのユダヤ人学校で教師をしていたカーンの自宅までが搜索を受けた。そして、リトアニアにいる同志たちの逮捕の報を受けるや出国を決意する。

1882年6月にカーンはニューヨークに到着する。ロシア・東欧系ユダヤ人のアメリカ移住は、アレクサンドル2世暗殺後のポグロムや締め付け・弾圧を逃れるためのものがほとんどで、暗殺後4半世紀で約200万人に及ぶ。ドイツ系ユダヤ人のアメリカ行きはロシア・東欧系のそれより半世紀ほど早く始まって

いたが、彼らの場合、更なる機会や富を求めてといった意識に基づくものも多く、実際、危険を伴う辺境地域での商売を手始めに大富豪となった者も多い。ロシア・東欧系に関してはそれとは違い、まさに、命を守るための最終手段としての渡米という趣が強い。

ニューヨーク到着後のユダヤ移民（以後、ロシア・東欧系の者をこう呼ぶ）は、マンハッタン南東部のローワー・イースト・サイド地区にあるテネメント（tenement）というアパートの狭い一室に一族全員がすし詰めになるような劣悪極まりない環境下に置かれ、仕事はというと、ほとんどの者が当時拡大期にあった服飾産業に従事した。ただ、それも、テネメントの一室に生地やミシンやアイロンを持ち込んだだけのところで大勢の者を働かせたり、場合によっては、自分のテネメントで家族総出で仕事に当たることもあり、決して優良とはいえないその労働環境ゆえ、彼らの仕事場はスウェットショップ（sweatshop）と呼ばれた。このスウェットショップについて、サンダースはジャーナリストジェイコブ・リース（Jacob Riis）の次のような言を引用している。

ユダヤ人地区の家庭は仕事場でもあった。…… イースト・サイドの通りの1つを1ブロックでも歩いてみれば、夜明けすぐから心と身体が完全に折れるまでの間、最大馬力で稼働させられる多くのミシンが放つ回転音でそのことは十分に感得される。最年少者から最年長者まで、その家庭の全構成員が、ムツとするような部屋に閉じ込められた状態で手伝った。そこでは1日中食事が調理され、服が洗われ、干された。男女子供含め12人が1つの小部屋で作業している場を目にすることも珍しくはなかった。(50)

さらに、リースは、自身が実際に目にし、サンダースが典型的スウェットショップと呼んだ場面を活写している。

5人の男性と1人の女性、15歳に満たない2人の若い少女と、聞かれもしないのに自分は15歳だと嘘をついた少年1人が、ラドロー街の方言で「ニーパンツ」とよばれるニッカーボッカーをミシンで縫っている。床には半分縫われた衣服がくるぶしが隠れるくらいまで重なり、散らばっていた。仕上げ係を待つばかりになった何ダースもの「パンツ」が置かれたソファの上では、痩せた顔をし、脚がむき出しになった赤ん坊がぐっすりと眠っている。積み重ねられた服が壁となり、赤ん坊が床に転げ落ちることはない。部屋にいる皆の顔、手、肘までに至る両腕は、自分たちが相手をしている布の黒い色で染まっている。(50-51)

「スウェットショップのロマンス」冒頭の部分と重なるところが多いことがわかる。なお、上記にラドロー街への言及があるが、本短編中の何か所かに登場するいくつかの街路も、当時ローワー・イースト・サイドに実在したものであることを付言しておく。なお、その具体的位置については、ハシア・R・ダイナー（Hasia R. Diner）著の『ローワー・イースト・サイドの記憶 — アメリカにおけるユダヤ人の居場所』（*Lower East Side Memories: A Jewish Place in America*. Princeton Univ. Press, 2000.）所収の地図を参照されたい。

カーン自身は、アメリカ到着後、スウェットショップではなく、葉巻工場やブリキ工場に勤めたのだが長続きせず、その一方で、社会主義を奉じるユダヤ移民たちの集会に出入りを繰り返していた。さらに英語の習得にも熱心で、1883年夏までには、つまり、ニューヨーク到着から約1年で、アメリカの新聞にローワー・イースト・サイドに関する記事をフリーランスで寄稿するまでになり、併せて夜学で英語教員を務めた。こうしてある程度の生活の安定を得ると、カーンは社会主義活動と文化活動に注力していくようになる。

社会主義者としてのカーンの活動について詳述はしないが、最も重要なものを2つあげるとすると、ローワー・イースト・サイドで働く服飾労働者たちの

待遇改善や権利拡充のために労働組合作りに励んだことと、自分たちの主張やユダヤ移民の現状を広く知らしめるための新聞『フォーワード』(*The Jewish Daily Forward*)を1897年に創刊したことであろう。ローワー・イースト・サイドには、これ以外にも各種出版社、組合本部、議論の場ともなるカフェなどがひしめいており、初期アメリカ労働運動の揺籃の地としての観を呈していた。

文筆家としてのカーンに目を転じると、その端緒は、前述したように、1883年からニューヨークの『サン』(*Sun*)をはじめとする英字新聞に寄稿を始めたところにあり、これらはニューヨークのユダヤ人地区を描写したもので、その後の本格長編の原点であるとサンダースは言っている。しかし、それらはいわゆる「スケッチ」であって、語りの要素や人物造型には欠けるものであるとも述べている(181)。

カーンは、「社会的意識がある」(184)との理由でウィリアム・ディーン・ハウエルズ(William Dean Howells, 1837-1920)を好み、形式や文体の洗練にはあまり興味を示さなかったと言われる。カーンは、「リアリズムの伝統の中でアメリカを代表する作家」(185-86)とハウエルズのことを位置づけ、「ハウエルズ氏は社会主義者ではないが、無意識的に、党派的情熱の圧迫から自由な立場で、アメリカ的生活の中に潜み、アメリカ的平等の嘘っぽさを赤裸々に曝すような1つの事実を作品中で強調し……強く際立たせている」(186)と自身で述べているが、サンダースはこれをもってカーンその人の文学観の反映であると評している。

こうして1891年、サンダースに言わせると、「『リアリスティック』な小説家としての本能が発動される」(188)形で初の短編小説を新聞に発表したのを皮切りに、いずれもニューヨークのユダヤ移民を主人公とした長編小説『イエクル』(*Yekl: A Tale of the New York Ghetto*, 1896)、『デヴィッド・レヴィンスキーの出世』(*The Rise of David Levinsky*, 1917)、ロシアにおける革命運動に題材を採った『白色テロルと赤』(*The White Terrors and the Red*, 1905)を

次々と出版し、また、余念なく短編小説の出版も心掛けた。

「スウェットショップのロマンス」で描かれたショップ内での雇用者・労働者間の主従関係が「アメリカ的平等の嘘っぽさ」を示唆していることは言を俟たない。一方で、サンダースは、長編、短編を問わずカーン文学に一貫して見られるモチーフのことを、「愛における挫折と失敗」(194)、「愛の失敗というテーマをめぐる道徳的物語」(200)、「実を結ばなかった恋愛関係」(421)、「愛することの失敗」(425)、という言い方で繰り返し強調している。本作品ではハイマンとバイルの関係がそれに該当する。この2つの点からも、本作品は、いかにもカーンらしいと評してよい初期の小品であろう。

さらに、サンダースは、この作品が、「社会主義的道徳性」よりもむしろ「哀調を帯びた内なる自己」の方へと関心を強めていることを指摘し、「未だ十分に意識されたものではないにしろ、カーンの心の奥底に宿るフィクション作家としての意志」(197)の顕現であるという趣旨のことも述べている。その意味では、「スケッチ作者」ならぬ「作家」としてのカーンの脱皮を示す作品であるとも言える。特に、そう長くはない時間経過の中でデヴィッドやバイルの意識に生起する各種の想念が詳細に描写されている様は、その中に読者を引きずり込まずにはおかない力強さを有しているし、デヴィッドとバイルの婚約にかかわる場面が時間的に前後していることも効果的な工夫である。

以上のことを、作品を取り巻く背景的事実として指摘しておきたい。なお、翻訳に当たっては、*Yekl and Other Stories of Yiddish New York* (Stonewell, 2013) に収録されているものを使用した。

「スウェットショップのロマンス」

ライザー・リップマンは、職工たちからは「ゴキブリ」という名称で一括りに分類される請負服飾業者の1人であった。「ゴキブリ」とは、俗な英語に翻訳

すれば、1人のミシン工、1人の仮縫師、1人の仕上げ係、1人のアイロン係かなる1組に職を与えるごく小さな店を経営していたということである。

店は、エセックス街沿いの倒れそうな古いテネメントの3階部分、一続きの3部屋からなる1室にあったのだが、店部分は、さらに加えて、リップマン家の台所兼食堂の用も果たしていた。その部屋は薄汚い小さな中庭に面し、窓のない寝室をはさむ形で居間と結ばれていて、居間の方は、ユダヤ人市場の、まさに中心部を見下ろす位置にあった。上着用に裁断されたいくつもの布束が床に散らばり、1つの壁の傍に無秩序に重ねられた状態で横たわっていたり、リップマン夫人の食卓用テーブルや1・2脚の椅子の邪魔をしていた。そして、隅の方ではそれが即席の寝台となって、ライザーの法定相続人たる薄汚い2歳の男児がその上で午睡をむさぼっているのであった。

扉を背に垂れ下がるか、布束の間に散らかるかのどちらかの形で、調理器具や汚いリネン類、リップマンのヴェルヴェット製スカルキャップ〔ユダヤ人が被る縁無し帽。訳者注。以下同じ〕、帽子、靴、大ばさみ、糸巻状の綿、等々が存在していた。灼熱の台所用コンロと、真っ赤になったアイロンで満杯の光り輝く火床とが相まって、ただでさえ高い部屋の温度をさらに上昇させ続け、スウェットショップという俗称を、その形容詞スウェットの文字通りの意味で正当化させるに足るものとなっていた。

仕事はかなり乏しい御時世ではあったが、その数多ある請負人の中の、リップマンもその一員であったブロードウェイの服飾会社のデザイナーが妻のまたいところであり、デザイナーの方でも、自分の親戚の夫が仕事からあぶれることの無いよう取り計らってくれていた。従って、ライザーの店の操業は全面稼働状態であった。ミシン工のハイマンは、屈強な両腕をむき出しにした状態で未完成の上着を前に押し出し、その際、彼の頭は、カールした豊かな茶髪を見る者に見せつける形で、獲物を狙う鷲のごとくその上に傾いていた。自分の機械が出すリズムカルな回転音に調子を合わせる形で彼は身体を左右に揺り動かし、

その回転音は、マイヤーのアイロンから生じる力強いドシドシ音に助けられる形で、仕上げ係の少女ベイルと仮縫師デヴィッドによって奏でられる歌唱デュエットの響きのよい、物悲し気な調べに対するオーケストラ風伴奏となった。

ライザーはブロードウェイの会社の方に出向いており、彼の妻のズラータは、ヘスター街を根城とする女小売商たち相手の長時間に渡る根切り交渉の旅にあった。この環境は、「親方」と「奥様」の存在によって普段は職工たちの自由に課せられていた制約からの一時的解放を彼らに与えた。ということで、彼らは時に歌い、時に自分たちの雇用主やその妻、あるいはお互い同士をやり玉にあげての嘲り合戦で仕事の退屈さや疲れを紛らわすのであった。

「いい加減やめてもらえないかな」丸々と太り、赤毛でそばかす面の 40 男であるマイヤーが、苛立ちながら自分のアイロンを一打ちすることでその気持ちを強調しながら言った。「息継ぎもせずにその歌ばかりもう 50 回じゃないか。こっちはうんざりなんだよ」

「お気に召さないの？ だったら両耳をふさいでいたらいいじゃない」自分の膝にある上着から顔を上げることもなくベイルが言い返した。

「いや、歌は歌でいいんだぜ。第 1 級プラスアルファだ」とマイヤーが応じた。「でも、あんたが口を閉じておいてくれたら、そっちの方がもっといいんだがなあ。わかるか？」

歌っている時のベイルの声が持つ銀器のような響きは、甘い憂鬱感でハイマンを震わせ、仕事へ向けての新たな喜びを彼に与え、彼の四肢に追加の活力を注入するものであった。それが、アイロン係のからかいで彼女の歌が中断されたものだから、音楽が突然途切れて予期せず動きを止められた踊り手たちが味合わされるようなイライラした気持ちで、彼は思わず自分の機械を止めた。

「あんたもな」苛立った顔つきをして自席から頭を回しながら彼は自らマイヤーに話しかけた。「話してくれてもいいんだが、黙っていてくれるとずっといいんだけどな。ベイル、気にすることはないよ。さあ、歌って、歌って！」そ

れだけを少女に言うと彼のまばゆいばかりの色白の顔は緩み、小さな両目は閉じられて、自信に満ちた勇敢さに伴う甘美な微笑へと変わっていった。

「仕事に専念した方がいいんじゃないのか、ハイマン。そんなことほざいてる間に半セント稼げたかもしれないぜ」と皮肉な顔つきをしながらマイヤーが吠え立てた。その言葉は、つまり、このミシン工は吝嗇家で、自ら過重労働をし、あらゆる快楽を自らから排し、自分の貯蓄口座の通帳に目を凝らすことで体重を増やす男だという噂に言い及んだものであった。

きつい言い合いが続いた。やがてその言い合いは、雇用主に対するハイマンの卑屈な振る舞いという話題へと流れて行った。

「お前じゃないのかよ」とマイヤーが言った。「親方へのクリスマスプレゼントのために金集めを始めたのは。こっちだって喰まざるを得ないだろうが。デヴィッドも何か言ったらどうだ？」

「あんたに強制したか？」とハイマンが反論した。「プレゼントのことを親方がそれとなく俺に投げかけたからといって俺が責められなきゃいけないことかよ？今はどこも不景気だ。ここで手にしている安定した仕事があるだけでも神に感謝すべきではないのか」自分のミシンの上にある上着を叩きながら彼は締め括った。

既に自分も歌うことをやめていたデヴィッドは、親方の食卓の上に広がっている素材に向かい、無言で針を動かし続けていた。そのうちに彼は手を止め、指を櫛代わりにして乱れた漆黒の髪をならし、ワイシャツの袖を使って浅黒くて髭のない、典型的にユダヤ人らしい顔から汗をぬぐった。

この動作が実行される中、デヴィッドの物憂げな薄茶色の視線は、仕上げ係の少女の上に釘付けになっていた。彼女は本能的にこの視線を意識し、針から自分の顔を上げた。部屋の温度と作業で紅潮した、彼女の生々しくて肉付きのよい顔が若い仮縫師に向けて照り輝いた。二人の視線が交わった。デヴィッドは顔を赤らめ、自分の気恥ずかしさを隠すためにこう尋ねた。「あのさ、親方は

君の給料を上げてくれるの？」

ペイルはうなずいてそれを肯定し、顔の向きを変えて再び作業に入った。

「そうなのか。だったら週5ドルになるんだね。そうなりゃもうお嬢様気取りができるじゃないか」

「私を妬んでいるの？ だったら喜んであなたと給料交換してあげるわよ。私の5ドルはあなたにあげる。私は毎週あなたの12ドルをいただくわ」

リップマンの店は出来高払いの店であった。スウェットショップ界の政治経済学においてその用語が有する意味からすれば、店のミシン工、仮縫師、仕上げ係は、名目上は週いくらかで雇われているものの、実際には出来高によって支払いを受けており、経済上の1週間は、地軸を中心にした地球の固定された回転数ではなく、仕上げられた上着の約定上の総数によって決定されるのであった。スウェットショップにとっては、与えられた量の仕事その間に達成されなければ、1日は太陽系の1日とは一致しないことになる。アイロン係については、例外なしに純然たる出来高払いである。

彼の解説は、その問題に対する揶揄という形で提示されるきらいがあるものの、そこはお許しを賜るとして、服飾部門における労働体系をより明快に説明するため、読者の注意をデヴィッドに向けさせていただきたい。本当のところ、デヴィッドは、無口に傾くきらいがある一方で根深い道化師でもあり、仕事の中に彼がふと漏らす二言三言が、仕事仲間の間にしばしば荒々しい陽気さを引き起こした。一方で、彼はその二言三言を、気楽さと、それとよく似た気立てのいい皮肉の表情とともに発し、その様子は、彼の顔が通常帯びるつっけんどんな表情と奇妙な調和をもって混じり合っていた。

「僕が毎週12ドルだって？」デヴィッドが復唱した。「そう言うか。それって、12日で1週間の勘定で言ってる？」そして、彼の針は家鴨の様なその運動を布の中で再開した。

「どういうことだ？」横にいる頓智に富む若者から冗談を引き出したくてマイ

ヤーが尋ねた。

「もちろん、どういうからくりでそうなるのか、あんたにゃわからんさ。ハイマンかベイルに聞いてごらんよ。あの2人もわかってるから」

「だったらあなたが教えてあげなさいよ。この人にもわかるようにさ」何かおかしいことが起こるぞと予測して、前もって笑いを浮かべながらベイルが促した。

本人にはまだ知られていなかったが、仕上げ係からくる要望はデヴィッドにとっては抗しがたいものであり、現状において彼の舌は緩んだ。

「そうね。僕は週 12 ドル、ハイマンは 14 ドルだ。今日、1 週間の労働日は 6 日間ということになっている。でも、うっうん、この「でも」というのが納得いかないところなんだが、でも、12 着の上着を作らないうちは日曜も月曜も終わらないんだよ。カレンダーってのは嘘だらけなんだ」

「どういうことだ？」

「1 日は 24 時間からなると人は言う。それは嘘だ。1 日は 12 着の上着からなる」

ベイルの露骨な含み笑いが彼の軽口欲をさらに刺激した。「今朝、人々はシナゴーク [ユダヤ教の寺院] で火曜日向けの詩編 [旧約聖書の一部] を読んだ。でも、僕は月曜日分を読むべきだったんだ」

「なんで？」

「つまりね、マイヤーの奥さんがそろそろ今日の昼御飯をもってやって来るだろう。でも、昨日請け負った 12 着の上着のうち 2 着が、僕にはまだ仕上がらずに残っている。だから、僕にとっては今はまだ月曜なんだ。僕の火曜は、午後の 2 時頃になるまでは始まらないだろうな」

「今週はいくらになるんだ？」とマイヤーが聞いた。

「週末までに 4 日分以上の仕事は終えられないと思う。だから、金曜には 8 ドルしか貰えないだろうな。それも、奥様がその時までには我々の給金を使っちま

わなかったらの話だがね。だから、金曜が来ても僕はそれを水曜と呼ぶ。わかったかい？」

「結婚したとして、」と暫し後に彼が追加で言った。「女房になる人が安息日用の出費を求めてきたら、今日はまだ水曜だぞ、まだ金曜じゃないぞと言ってやるんだ [ユダヤ教の安息日は金曜の日没から土曜の日没まで]。お前にやる金はないぞってね」

デヴィッドは再び沈黙に陥った。だが、口には出さない形で、あっちの話題こっちの話題と飛び移りながら自分の茶番を続けた。

デヴィッドは自分のことをとても変な男だと思っていた。自分自身の想像力が習慣的に生み出す悪ふざけのこと、しばしばその想像力が生じさせる奇怪な組み合わせのことに彼はよく思いを致した。今も自分の仕事に向けて身を屈めた状態で立っていた彼は、なぜマイヤーが自分に数字の「7」を思い出させるのだろうかを理解しようと必死になっていた。

「何てくだらない！」自身に変人の烙印を押しながら彼は心の中で叫び声を上げた。その一方で、「ハイマンはどう見えるかな？」と、相手が悪意の対象でもあるかのように彼の心は尋ねるのであった。彼は横目でミシン工のことを凝視し続け、その若者に対応する何かを求めて思いつく限りのアラビア数字や、ヘブライ語のアルファベットまで心の中で転がしてみたが、適当なものは何も見い出せなかった。「あいつの顔はむしろ女の子っぽいんだ」と彼は最終的に結論付け、心の中でハイマンの顔をバイルのショールで包み込んでみたりした。でも、そちらの方向での連想は幾分か自分に痛みを与えるものであったので、彼は続けて、ミシン工のずんぐりした鼻の方に思いを向けた。「いや、あの鼻は女の子にしては醜すぎる。少し平らにする必要がある。いわば未完成の仕事だ。その鼻がなければ、ハイマンは、本当の意味で皆が言うようないい男になれるだろう。彼の雪のように白い肌、優美で重々しい口髭、本当にあの鼻さえなければ完璧なのにな」彼は心の中で意地悪くふざけた。「それに、ハイマンから鼻が

欠けたら、この僕だってそこそこということになるだろうに」と、自分の思いをベイルの方に向かわせつつ彼は思いを重ね、あの娘は何でこんなに可愛いんだろうと思うのであった。「大体、あの娘の鼻だってそんなに素敵じゃない。真っすぐ過ぎるし、それにバカっぽ過ぎる。両目は年寄り臭いし、いつも泣き出す直前みたいに見える。ああ、でもその唇、彼女の口の片端から生じるあの優しそうな微笑ときたら！」そして、自らをその唇の方に投げ出し、そこにキスをしたいという強い衝動が彼を捉え、彼はその通りのことを心の中で行くと、それが彼の身体全体に電流を走らせるのであった。さらに、その瞬間、ベイルの年寄りっぽい視線が彼を魅了し、なおかつ心の奥底まで届いた。その鼻も、バカっぽく見えるどころか、今のおまえの心の内を読んだぞと言わんばかりに蔑み、勝ち誇り、心得顔に自分のことを見詰めているように思われた。

こんなことがデヴィッドの頭と心の中を駆け巡っていた間、ベイルの方は、ハイマンと、自分とハイマンの関係に心奪われていた。彼女に対するハイマンの関心は公然の秘密だった。わざわざそれを隠そうともしなかった。それどころか、彼は仕事のあとはきまって彼女を家まで送り、舞踏会やピクニックに連れ出した。これなどは、自分が出費する1セントごとに震え上がり、預金残高の減少に対しては食事を抜くことで必ず埋め合わせをするような男にとっては多大の犠牲を伴う行為といえた。彼女の母親の住居の廊下で2人きりでいる時などは、彼の声はとても優しく、震えがちのものとなり、時には彼女のことを、親愛の情を込めたベイリンケという愛称で呼んだりもした。しかし、こうした状況がもう3か月以上続いているのに、彼の方は結婚のことを口にもしないし、ささやかなプレゼントを買ってやることさえしていなかった。

彼女の母親が彼女にとって人生を重たいものにしており、正式に婚約するか、さもなければ契約不履行での逮捕か、選択肢はどちらかだとはっきり相手に突きつけろと迫るのであった。そんな醜聞の主人公になるくらいだったら死んだほうがましだとベイルは思った。ハイマンが警察官に手錠で繋がれるなんて、考

えるだけで恐ろしく、一瞬たりとも考えられるものではなかった。

彼女は彼のことを愛していた。咲き誇る彼の顔、その紳士らしい口髭、歩く時の不思議な頭の動き。一緒にいるのが好きであった。彼に恋していることを確信していた。最近アイロン係のマイヤーと結婚した、同郷で遊び仲間の親友などもそう請け合ってくれた。

しかし、何とはなしに失望も感じた。愛とはもっと甘美なものだと想像していた。恋する女性は、自分の愛情の対象たる人の中にあるすべてを崇め、その人のどんな欠点にも盲目であるものだと思っていた。愛とは永遠の、恵みに満ちた心の疼きであると聞いていた。

「ここにある何かが溶けているような感じがする」と、かつて結婚直前の女友達が自分の胸を指してこう告白した。「痛いんだけど、でも、それと同時にとても甘いよ」でも、「ここ」に関しては、ベイルは何も溶けている感じがしないし、ハイマンのいくつかの部分については嫌いにならざるを得ない。彼の微笑も時にくどく思える。ああ、微笑むとき、あんなふうに目を閉じないでくれるといいのに。なかなか財布の紐を緩めないという点は、むしろ彼女が気に入っている点の1つである。もし彼が自分と結婚すれば、彼の賃金は間違いなく1セント残らず自分の手の中に入るだろう。でも、2人で舞踏会にいる時など、他の男たちが恋人にするように、バーへ行ってソーダを1杯ご馳走してくれるようなこともしたためしがない。彼が自分にくれるものといったら、リンゴ1個か梨1個、それも大抵は、舞踏会場へ行く途中に道端で立ち止まって買ったもの。自分は本当に愛しているのかしら？もしかして私の勘違いかも？いや、待つて！何だかんだいってあの人は自分にとっては愛しくてたまらない人。悪いのは自分に違いない。お母さんが私を指して、自分はおろか周囲にも安らぎを与えないメソメソ女、ガミガミ女と言うけど、あながち的外れではないかも。でも、何であの人は申し込みに来てくれないのだろう？あまりにケチで奥さんを養いたくないから？私をからかっているだけ？だとしたら、私のことをなんだ

と思っているのだろう？

公平な目でハイマンを見ると、少なくとも彼の意図に関しては、彼女の判断は根拠の無いものであり、彼女の心配もいわれ無きものであるということは言われねばならない。金銭への思いは、彼女への求婚の遅れとは何ら関係がなかった。そして、いつものように自分の通帳に目を通している時の彼の姿を見、その心中を見通せたなら、彼の眼前には残高欄の数字の群れに混じって彼女自身の小さな像が漂い続けていたこと、残高合計が将来の至福の図を彼に想起させ、その図の中心人物の座に自分がいることを彼女は確信できたであろう。

憐れむべきかな。辞去する際、廊下で彼女の手を名残惜しげに撫でている時、求婚の言葉が彼の舌尖にあったこと、その重圧を取り除く力に欠けていたため、今はまだその時ではない、「明日こそは決着をつける」という思いで自身を慰めながら彼が毎回自分のもとを去って行ったことを彼女は知らなかった。彼女は知らなかった。ほんの2日前、婦人用時計という形の使者の助けを借りてはどうだという考えが彼に浮かび、そして今、自分はからかわれているのではと彼女が心配しながら座っているさなかにも、その黄金の使者はハイマンのチョッキのポケットの中にあり、彼の心臓に合わせて鼓動を打ちながら、伝言の配達のために指定されていた夕方のひと時を、今か今かと待ち焦がれていたということ。

「彼にはお母さんの方から話してもらおう」針を動かしながら考えてベイルは心に決めた。その時の光景を心に思い描いてみたものの、この時点で、自分の髪を掴み、引っ張る何かによって彼女の思いは突然破られた。犯人は雇い主の息子であった。昼食後の昼寝から目を覚ましたばかりで、ほかに面白そうなこともなかったので、自分の薄汚れた小さな手を彼女の黒髪の中に突っ込んだのである。

「親方になる練習をしているんだよ」仕上げ係の金切り声によって現状に気がかされたデヴィッドが言った。

ペイルの声を聞いたハイマンは立ち上がり、その子の指を少女の髪から引き離すと、彼の言い方によれば、「本人のためにその汚い両頬に漆喰を塗ってやる」ことに専念した。この頃合いで扉が開き、小悪人の父親が入って来た。ハイマンはむっとり自席に戻り、仕事に顔をうずめると、母親がたまたまその場にいたらもっと高い音を発していたであろうその子の叫び声を自分の機械の回転音で消しにかかった。

リップマンは上着を脱ぎ、ダービーハットを油ぎったヴェルヴェット製スカルキャップに取り換えると、善良な実業家然とした貫録を見せつけながら葉巻に火をつけて、マイヤーのところに進み出ると1着の上着を調べ始めた。

「で、あの男はどんな風に見える？」自分の親方の方に目を凝らしながらデヴィッドが自問した。「持ち手が下を向いた箒のよう」、そう結論付けると満足を感じた。「そして、彼の嗅ぎ煙草入れは？」リップマンの巨大な鼻のことである。「完璧なバイオリン！じゃあ口は？聾啞者が普通あんな口をしているな。髭は？どう見たって多過ぎだろう。それに、あの顔にはおしゃれ過ぎ。間違っ

程なくして、扉が再び跳ねるように開くと、重たそうに箱をいくつも抱えて息を切らせたリップマン夫人が、年のいった夫婦を従えてよろよろと入って来た。

「新参者のユダヤ人だな」とマイヤーが言った。「最近アメリカに着いたばかりの同郷人に違いない」

「やかんみたいだな。その上、やかんみたいに蒸気を上げていやがる」無関心そうに新参者たちの方に目を向け、太ってけばけばしい背の低い「奥様」を横目で見ながらデヴィッドは思った。「いや、違う」彼はその後訂正した。「むしろ持ち手のない箒に似ている。それだ！で、あの人の頭に持ち手を結び付けて、そのおぞましい代物で床を掃いたら面白くはないか？口はどうだ？あの口からすると、くしゃみ以外のことはしない人に見える」

「ライザー、いたのね！ライザー、お客様をお連れしたわ！」荷物を放り出しながらズラーテが叫んだ。「どうぞお座りになって、アヴロムさん。座ってちょうだい、ベース。ここがうちの工場よ」これ見よがしの挨拶が終わるのに合わせて、歓迎と勝利感が入り混じった微笑を浮かべながら彼女が言った。「狭過ぎるわよね？でも、もっと広くて環境のいいところに越す予定にしているの」

マイヤーは間違っていなかった。ズラーテのお客さんというのは、西ロシアの貧しい町にある彼女と同じ故郷から最近やって来たのであった。しかも、その町ではこの夫妻、目の前でもてなしてくれているご婦人と比べてずっと高い社会的地位を占めていたのである。であるから、リップマン夫人は、ヘスター街で2人に行き合うやいなや、アメリカでの自分の成功を見せつけるため、間髪を入れず2人を招待したのである。

「どうぞ、居間をお見せするわ」同郷人たちを差し招きながらリップマン夫人が言った。そして、彼女が勧めてくれていた椅子を利用する機会も得られぬまま、2人は居間へと引き込まれていった。

一行が戻って来ると、ライザーは、妻からの指示に従ってアヴロム氏の相手を引き受け、「アメリカ流服飾」の極意についての伝授に及んだ。

「あら、ついうっかり！」微笑を浮かべながらズラーテが突然声を上げた。「おもてなしを忘れるところだったわ。バイルケ！」彼女は、高慢さを含んだ無頓着が感じられるような声で仕上げ係の少女に声をかけた。「5セント渡すから食料雑貨店でソーダを2瓶買ってきてちょうだい」

「行くことないよ、バイル！」彼女が嫌そうに感じているのを見て取ってデヴィッドがテーブル越しにささやいた。

いつも嫌々、今の自分の立場を失うこと怖さにやっていただけではあったが、バイルが自分の雇用主の妻の使いに走るのは珍しいことではなかった。しかし、そうは言っても、ズラーテは、こういった奉仕を自発的好意としてすべからく強いるのであった。だが、現状バイルは、相手の命令口調に死ぬほどの腹立た

しさを感じており、他人の前で召使いとして動かされていると思うだけでも骨の髄まで傷ついた。彼女の顔にさっと赤みが差してきたことでもそれがわかった。にもかかわらず、先々また仕事を探さねばならなくなるかもしれないと考え、ズラーテとの悶着は避けるべきという思いの方が勝り、硬貨を受け取ろうと手を伸ばそうとした、まさにその瞬間、デヴィッドの勧告が彼女の自尊心を刺激し、彼女は針仕事を続けた。訪問者の視察によって仕事を中断させられていたハイマンはその場面の目撃者であったが、この時点で顔を背けると、自分の機械の傍に縮こまり、ミシンのシャトル相手に忙しいふりをした。自分の状況の無様さがわかると彼は胸が縮む気がした。そして、神経質そうに歯を噛みしめて目を閉じ、更なる痛ましい成り行きを待つ思いであった。彼の心は恋人への憐れみとデヴィッドへの激しい憎悪で染まった。自分に何がきょう？彼は自らに向けて弁明した。ソーダを1瓶買ってくるなどという些事のために、この不景気の中安定した仕事を失う危険を冒すなんて、馬鹿げてはいないか？何のゆえあってデヴィッドが口出しなどするんだ？

「聞こえないの？ソーダを買って来いと言っているのよ。早く！」やり過ぎかと懸念しながらもリップマン夫人は叫んだ。

「動くな、ベイル！」両目に炎を湛えながら仮縫師が促した。

ベイルは動かなかった。

「行けと言っているのよ！」流行の文句を使うなら、ピーツのように顔を赤らめながらズラーテががなり立てた。

「いいのよ、ズラーテ」と、困った状況を何とかしようとベースが割って入った。「お茶もいただいたところだし」

「気にしないでおくれ。わざわざそんなことしてくれないで結構だよ」とアヴロムも介入した。

しかし、これもズラーテをさらに激しい怒りへと駆り立てただけだった。そして、結果に思いを致すこともせずに、彼女は自分の苦境の原因となった女の

ところへ大股で歩いて行き、上着を本人の両手からもぎ取ると、金切り声を上げた。「ソーダを買ってくるか、私の店から今すぐ出ていくか、どちらかよ！」何かはわからぬものの、ハイマンは何かを言おうと、何かをしようとした。だが、彼の舌は麻痺に捉われたみたいになり、血液は血管の中で凍りつき、口をきくことも、身じろぎすることもできなかった。

穏やかで、平和的な気質の持ち主で、大いに妻の尻に敷かれていたライザーは、笑みを浮かべ、髭をいじりながら神経質そうな様子で立っていた。

デヴィッドは、灰のように青白い顔色になり、怒りで身を震わせながら大声で、そしてゆっくりとした口調でこう言った。「ベイル、あんな女のことは気にするな。心配なんかしなくても大丈夫。行くぞ。もっといい仕事を見つけてやるよ。こんな風に脅してみたって無駄ですよ、奥様。お友達がすべて見ておられる。そうですよね？」彼は自ら新参者たちに語りかけた。「あなた方に威張ってみせただけなんです。わざわざあなた達を連れてきたのもそのためです。居間のカーペットを見せびらかしましたでしょう？でも、それは分割払いで購入されたもので、しかも、もっと規則通りに支払ってくれなければ取り払いますよと売り手の方がきつく言ってきているということまで話しましたか？」

「ライザー！あなたって人は、酔っ払ってでもいるの？」怒りと絶望で顔をゆがめながらリップマン夫人が喘ぎ声で言った。

「ここから出ていけ！」愛想のいい誘いかけにこそふさわしいような口調でライザーが言った。

しかしながら、その命令も不要であった。というのも、この時までに既に、デヴィッドは外套のボタンをはめつつあり、帽子も被っていたからである。無意識的に彼の例に倣う形で、ベイルもまた、出ていくための服装を整えた。彼女が、目新しいビーバー地のコートと、新たに手入れされた大きな古い帽子をまとった姿で、挫折させられた支配者の横に立つ時、立場は逆転し、仕上げ係の少女の方が婦人のように、ズラーテの方がむしろ彼女付きの召使のような姿に

ベースの目には映るのであった。

「我々の金曜日分の給料は用意しておいてくださいよ。それに、未払いの分も全部！」それだけの捨て台詞を残すと、挑戦的にドタンと扉を閉めて2人は部屋を出て行った。

「これがアメリカよね！」軽蔑的な微笑を浮かべようと努めつつズラータが言った。「卑しい乞食娘が威張るのなんの」

「あんな風に命令されなきゃならないものか？あの娘だって召使じゃなかろうに」部屋の片隅に向かってハイマンが言葉を漏らし、自らの惨めさを押さえつけるために自分の機械へと体を預けた。

その日の仕事が終わると、ハイマンは、気持ちの上でベイルと顔を合わせる気持ちになれず、会いたくて会いたくてたまらない思いはあったものの、彼女の家を訪れることはしなかった。翌朝、彼は頭痛とともに目覚め、これを自らに対する口実に使って夕食後すぐに床に就いた。

翌日の夕方、恋人が母親と一緒に最上階で暮らしているディヴィジョン街のテネメントまで強いて自らの身を運んで行ったのだが、建物の前まで来ると勇気が萎えてしまった。忘れようにも忘れられない2日前の場面において臆病な振る舞いしかできなかったことに加え、仕上げ係に対する明白な無関心が今やそこにはあった。こんな大事な時期に2日も行かなかったことでもそれは明らかであろう。自分の行動を説明するための言い訳で彼は自らを武装させた。しかし、それも無駄に終わった。恐ろしい対面の場に自ら臨む勇気が持てなかったのだ。そんな感じで1日1日が過ぎて行き、その度に、自ら望んだ訪問への障害が募っていった。

しかし、遂に、リップマン夫人の大騒動の日から約2週間後のある晩、ハイマンは、いわば勇気を失うことを忘れる思いで、ディヴィジョン街のテネメントの階段を4階分、きびきびと上って行った。中に入るためにノックをしようとしたまさにその時、磁器製の皿かボールか何かが、自分が開けようとしてい

たその扉に投げつけられて粉々に砕けたような、部屋の中からのかん高い音に見舞われた「ユダヤ教に基づく結婚式では、新郎・新婦が足下でグラスを割るという儀式があるが、それと関連する行為と思われる」。その大音響のあとには、「お幸せに！お幸せに！」という陽気な声が続いた。その意味するところを間違えることなどありえなかった。明らかに、中では婚約パーティーが行われていたのだ。既にラビが婚約の式辞を読み終えた後で、契約を交わす両者の側のお互いの誓いが、「皿の破壊」によって強調されていたのだ。

間もなく、ハイマンは叫び声を耳にした。それは、今しがた中で終わったばかりの儀式的主人公たちの正体に関する、彼が抱きうる疑念をことごとく四散させるものであった。

「お幸せに、デヴィッド！お幸せに、ベイル！2人でいつまでもお幸せに！」「フェイジ、ケーキを食べたらどうなの？そんなに恥ずかしがることないじゃない！」「ここに幸ありだ！」といった言葉が、くぐもった声のおしゃべりを通り抜ける形で扉の向こうから聞こえてきた。

ハイマンは声も出なかった。そして、頭がぐらぐらする中、急ぎ退却した。

リップマンの店での悲喜劇的出来事以来、あの恐ろしい場面ですっと機械の傍らに座っていただけの憐れむべき臆病な態度以外の姿でハイマンのことがベイルの思いの中に現れ出ることはなかった。今や自分は彼を憎んでいると確信していた。それでも、最初の数日間は、彼に来てほしいという思いで彼女の心はずっとうずいていた。やがて、仮に来たとしても自分はもう彼とは何の関係もない身だという思いに落ち着く一方で、彼女の深奥の意識が、確信の微笑を浮かべながら、「でもね、あなたは彼を拒んだりはしないわよね。一生独身でいる危険を冒したりはしないわよね」と言っているような気がした。彼が自分を捨てたという思いは日夜彼女を苦しめた。自分がリップマンの店を辞めたのをいいことに、当然期待されていながら、それでも本人はもしかして考えもしていなかった求婚という行為から、彼は逃げ出したのだろうか？自分を弄んだだ

けだったのか？

ハイマンが姿を見せることなく1週間が経ってしまうと、彼女は、母親に頼んで契約不履行の手続きについて弁護士に相談してもらおうと心に決めた。だが、ここ数日間彼女の心中で輪郭を強めてきていた1つの像がこの決心を抑え込んだ。それは、ハイマンより勇気がある人の姿、妻を守ろうという気持ちをより内に備え、自分の中により強い敬意と信頼感を生じさせ、さらにそれ以上に、今にも自分に求婚してくれるのではないかと思わせてくれるような人、の姿であった。

それはデヴィッドの姿だった。その若い仮縫師は、静かな粘り強さと抑えた熱意で求愛を続け、程なくして少女の心をつかんだ。彼は、彼女と自分自身のために同じ店で仕事を見つけ、毎晩彼女を家まで送り、夕食後定期的に現れては彼女を散歩に連れ出し、その際にはキャンディーをおごったりカフェに誘ったりし（ハイマンが一度もしなかったことだ）、自分の冗談でクックと笑わせたりもした。そして、最終的にある晩、セントラルパークで彼女の傍らに腰を下ろしていた時、暗過ぎて自分がどこにいるのかわからないわという相手の言葉への返答として、彼は、「君がどこにいるのか教えてあげよう。考えてごらん」と言った。

「どこ？」

「ここ、僕の心の中さ。しかも、毎日夜が来ても寝かせてくれない。そんな風に自分の休息を君に妨げられなきゃいけないなんて、僕が一体何をしたというんだい？ 教えてくれよ、ベイル」

彼女の心臓は鍛冶屋が使う大ハンマーの如く高鳴っていた。「わけわかんない。冗談言うことをやめられないのね？」と切り返しながら彼女は笑おうとした。

「冗談？ そんなこと言われたら泣くしかないよ。婚約パーティーをすることに君がウンと言ってくれるということがわかりさえすれば喜んで泣くけどね」暗闇に紛れて真っ赤になりながら彼が応じた。

「いつにするの？」彼女が自覚するより先に言葉が唇の外側まで達していた。
「自分としては明日だな」

註

- (1) 本稿の「序」部分については、『文学と評論』第3集第16号（2023）所収の拙稿「（翻訳）「環境」（1）」と重なる部分があることをお断りします。
- (2) “Cahan”の発音であるが、『英米文学辞典 第2版』（研究社1985）には「カーハン」、「カーン」と2つの発音が載っており、浜野氏は「カーン」を使用している。アメリカでレスリー・フィードラー（Leslie Fiedler）からユダヤ系文学の個人指導を受けたという、前掲の同氏著書「あとがき」にある氏自身の言により、ここでは「カーン」を採用したい。